

Title	『新エロイズ』における欲望と規律(2) : ルソーにおける「自然」の両義性の問題を中心に
Sub Title	Le désir et la discipline dans La Nouvelle Héloïse : à propos de l'ambivalence de la nature chez Rousseau
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.48 (2009.) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20090331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『新エロイーズ』における欲望と規律(2) ——ルソーにおける「自然」の両義性の問題を中心に——

井 上 櫻 子

前回の論考では、エリゼの庭におけるサン＝ブルーの夢想（『新エロイーズ』第四部書簡11）を考察の出発点とし、ルソーはなぜこの庭をサン＝ブルーの内的変貌の場として選んだのかという問題について、一つの回答を示すことを試みた¹⁾。端的に述べれば、エリゼの庭におけるサン＝ブルーの「回心」は、まさにこの庭の「両義性」を巧みに利用したものである。ジュリの手になるエリゼは、「自然の秩序」を模するクララン共同体のひな形になっているにもかかわらず、一歩足を踏み入れただけの人間にはあたかも「ありのままの自然」を保持しているかのように見える。ところで、田園詩の伝統をふまえると、「ありのままの自然」の表象は、『新エロイーズ』第一部よりサン＝ブルーの欲望をかき立てるものとして機能していることが分かる。そのため、一見「ありのままの自然」を残すかに見えるエリゼの庭で、サン＝ブルーは高まりゆく欲望に自由に身を任せる楽しみを享受しようとする。にもかかわらず、一歩エリゼに足を踏み入れた彼の心に呼び覚まされるのは、当初の期待に反して、彼の欲望するジュリの表象ではなく、幸せな共同体のイメージである。そして秩序だった共同体の表象を心に思い浮かべることにより、サン＝ブルーは期待した以上に心地よく夢想できたと納得する。かくして、サン＝ブルーは共同体の秩序にあわせて内発的に情念を律するようになるのである。

1) 井上櫻子『『新エロイーズ』における欲望と規律(1)——「エリゼの庭」にみられる田園詩的テーマとその変奏——』『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』、第47号、2008年、pp. 1-17。

さらにエリゼの庭の解釈を通して、サン＝ブルーを規律に従わせてゆく試練のなかで、ルソーが「ありのままの自然」を残した、あるいは「残しているように見える」秘密の空間を、意識的に用いているのではないかという仮説を提示した。本論考ではこのような仮説の正当性を立証すべく、まずは「メーユリ巡礼」にかんする名高い書簡（第四部書簡 17）における自然の表象について考察してみたい²⁾。さらに、同様の視点から『新エロイズ』全体を再読する。このようにして「ありのままの自然」と「自然の秩序」という二つのイメージに隠喩的に表された欲望と規律との相克について検討してゆきたい。

I. メーユリ巡礼についての書簡における自然の表象

サン＝ブルーはかつて厳しい寒さの中でジュリの姿を思い描き、彼女へ手紙を書いた隠れ家を、ジュリとともに再び訪ねるといふ「秘密の計画」を抱いている³⁾。そして生い茂った森や岩によって隔絶された「隠れ家」に到達すると、そこにはやはり「ありのままの自然」が残され、透き通った小川が流れ、「果実」のなる木がはえ、花が咲き乱れている。

私たちのいる狭い土地はこのように偉大で壮麗な事物に取り巻かれ、そこには眺めのよいひなびた土地の魅力が備わっていました。いく筋かの小川が岩を縫って湧き出ており、緑草の上を水晶のように澄んだ網目を

2) メーユリ巡礼と湖上の散歩については、特に次の論考を参照した。Felicity Baker, « La scène du lac dans *La Nouvelle Héloïse* », dans *Le Prérromantisme. Hypothèque ou hypothèse ?*, actes du colloque établis et présentés par Paul Viallaneix, Paris, Klincksieck, 1975, pp. 129-152.

3) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XVII, dans *Œuvres complètes* t. II, 1964, Paris, Gallimard, « la Bibliothèque de la Pléiade », édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond (1959-1995, 5 vol.), p. 517. 以下、ルソーの引用についてはこの版を典拠とし、O. C. と記したうえ、巻号はローマ数字で記す。綴りは現代のものに直すこととする。

なして流れていました。幾本かの野生の果樹が私たちの頭の上にこずえを傾け、湿ったみずみずしい土地は草花に覆われていました。これほどにも甘美な土地と周囲の事物とを比べてみると、このもの寂しい場所はまさしく自分たちだけ自然の変動から免れた恋人同士の避難所に違いないと思われるのでした⁴⁾。

メーユリ巡礼にかんする書簡については、これまで自然描写——とりわけ波立つ湖の描写——に見られる律動的なルソーの文体や、記憶のテーマ系など、ロマン主義の先駆者ルソーとしてのイメージを強調する解釈が行われてきた⁵⁾。しかし、第一部で提示される「シャレー」、第四部に描かれるエリゼの庭、そしてメーユリの隠れ家と順に読み進めてみると、むしろいかにルソーが伝統的な田園詩のトポスに想を得た「型通り」の自然描写を繰り返し用いているかということに驚かざるを得ない。とはいえ、論者がここでルソーの描く「自然」を「型通り」と形容したとしても、決してルソーの創出する自然の表象に否定的価値を付与しようとしたことではない。なるほど、外界の自然をどれほど細やかに描き出しているか、という点に注目するならば、のちのロマン主義の作家、たとえばセナンクルの作品にあふれる色彩豊かな自然描写は、『新エロイズ』にはいまだ見いだされない。そのことを認めた上でなお興味深いのは、ルソーが花咲き、鳥が楽しげに歌う平和なパストラル的空間を描き出すと見せながら、この純朴な田園生活のタブローに、サン＝ブルーのうちで高まりゆく欲望を隠喩的に示しているということではないだろうか。ルソーにおける自然の概念はきわめて両義的だ。彼の用いる「自然」という言葉は、一方では人間が自由に欲望を満たしながら平和

4) *Ibid.*, O. C. II, p. 518.

5) たとえば以下の文献を参照のこと。Yves Le Hir, « Jean-Jacques Rousseau : *La Nouvelle Héloïse* (IVe partie, lettre 17, fin) », dans *Styles*, Paris, Klincksieck, 1972, pp. 54-61 ; Robert Osmont, « Les théories de Rousseau sur l'harmonie musicale et leurs relations avec son art d'écrivain », dans *Jean-Jacques Rousseau et ses œuvres. Problèmes et recherche*, Paris, Klincksieck, 1964, pp. 329-348.

に生きることの出来る「ありのままの自然」⁶⁾を表し、他方では社会的動物としての人間が情念を律する規範としての「自然の秩序」を表す。それゆえ、ルソーにおけるこの「自然」の概念の両義性は、サン＝プルーの欲望と共同体の規律との相克という主題と重なり合い、物語の筋を展開させてゆく原動力となるのである。

「ありのままの自然」のように見せかけながら、クラランの共同体の秩序を写し取ったエリゼでの試練のあと、メーユリ巡礼へと出立するサン＝プルーは、クララン共同体の外、まさに「ありのままの自然」の中でも共同体の規律を守ることが出来るか、というさらに困難な試練へ向かうことになる。加えて、メーユリの隠れ家にはかつての恋の記憶の記号として、ペトラルカやタッソーの恋の歌、ジュリのイニシャルが刻まれた岩が存在する⁷⁾。この長い書簡体小説を読み進める読者は、ここで繰り返し高められては抑圧されるサン＝プルーの欲望の結晶された空間に出会うことになるのである。この「隠れ家」がそのような危険な空間であることは、この秘密の場所の「空気をすったジュリの気分が優れず、仕方なくここを立ち去るサン＝プルーの言葉からもうかがい知ることが出来るだろう。「私はこの悲しい隠れ家を、永遠に捨て去ったのです。あたかもジュリ自身を捨ててしまうかのように。」⁸⁾

メーユリ巡礼の場面が続くのは、湖上でのサン＝プルーの夢の場面である。正確には、「*rêverie*」という名詞ではなく、「*rêver*」という動詞が用いられているが、たとえば「第七の散歩」でも「*rêver*」という動詞を用い

6) 論者はここまで『新エロイズ』においてパストラルを思わせるような筆致で描き出される「ありのままの自然」が、サン＝プルーの欲望をかき立てるものとして機能していることを指摘してきた。ところでS. ムナンは、ルソーが1730年代にグレッセの「田園詩の世紀」に関心を示していたことを指摘し、ルソーと同時代の詩人との関係を強調している。Sylvain Menant, *La Chute d'Icare*, Genève, Droz, 1981, pp.118-121.

7) *Ibid.*, O. C. II, pp. 518-519.

8) *Ibid.*, O. C. II, p. 520.

で夢を表していることから⁹⁾、ここに描かれる精神状態も夢想ととらえても差し支えないだろう。

オールの一様でリズムカルな響きは私を夢想させました。バカシーヌのかなり陽気な歌声に過ぎし日の楽しさを思い起こし、明るい気持ちになる代わりに物悲しくなりました。次第に憂鬱な気持ちが募ってゆくのを感じ、打ちひしがれました。静謐な空も、やさしい月の光も、私たちの周りで水を輝かせている銀色のさざ波も、このうえなく心地よい感覚がそろっていても、最愛の人が目の前にいてくれても、何一つとして私の心から無数の苦しい思いを遠ざけることは出来ませんでした。

はじめに、昔私たちが初恋に魅せられていた頃にあの方とこのような舟遊びをしたことを思い出しました。その時心を満たしていたあらゆる甘美な感情が浮かんできて私を苦しめました¹⁰⁾。

鳥の鳴き声、オールのリズムカルな動きはサン＝プルーを夢へ誘う。水、湖がジュリの欲望のメタファーであることは、以下の点から分かる。まず、世界周航から帰還したサン＝プルーが湖を目にした時に精神の高揚を覚えること¹¹⁾。次に、ヴォルマールが「水」に対して強い恐怖心を持っていること¹²⁾。さらに、子供を助けようとして水の中に飛び込んだジュリが死の床でサン＝プルーへの変わらぬ愛を告白する作品の結末¹³⁾からも明らかである。波立つ湖に加え、やはりここでも「楽しげにうたう鳥」のイメージが挿入されており、外界から与えられる心地よい感覚は、サン＝プルーを危険な欲望の夢へと誘う。共同体の秩序を模するエリゼの庭での夢では、サン

9) *Les Rêveries du promeneur solitaire*, « Septième Promenade », O. C. I, p. 1065.

10) *Ibid.*

11) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre VI, O. C. II, p. 419.

12) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XIII, O. C. II, p. 504.

13) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Sixième Partie, lettre IX, O. C. II, pp. 702-703.

=ブルーは時間意識から解放され、恒常的な精神的快樂を享受していた。しかし、この湖上の夢想においては、彼は心地よい感覚を外界から享受しつつも、過去と現在の相違を痛感し、強い苦痛に苛まれる。この湖上の夢想は、徳、すなわち自然の秩序に従うべく無軌道な情念の湧出を律するサン=ブルー自身の内面の力によって超克される¹⁴⁾。エリゼの夢想と湖上の夢想が、それぞれサン=ブルーに与える影響の相違からは、夢想の快樂は、外界から受ける心地よい物理的感覚に由来するのではなく、外界に調和しようとする(か、否かを決定する)内面の意志的な働きが前提されていることが分かる。そしてまた、恒常的な快樂を享受することが、「ありのままの自然」というイメージによってかき立てられる奔放な欲望に身を任せるか、あるいは「自然の秩序」に合致すべく情念を律するののかという二つの選択肢から、サン=ブルーが自身のあり方を意志的に選びとる際の重要な要因となっていることも明らかになるのである。

II. 快樂の一夜にかんするエピソードと二つの「自然」のイメージ ——羞恥心の問題をめぐる——

快樂の享受が、サン=ブルーを規律に従わせる際の説得の手段として機能していることは、サン=ブルーを共同体の規律に従わせることが主題となる『新エロイズ』後半に限ったことではない。実は、第一部の快樂の一夜にかんする一連の書簡からも確認されるのだ。次に挙げるのは、サン=ブルーがジュリの部屋で一夜をともに過ごした感動を興奮冷めやらぬ調子で語っている書簡(第一部書簡55)からの一節である。

ジュリさん、私の命と存在を造ってくれるのはまさしくあなたなのです。(中略) この自己充足した魅惑的な状態からほど遠いところにあることでしょう。私は肉体的快樂を享受したいと思い « je veux jouir », あなたは愛したいと思うのです « tu veux aimer ». 私は激情を持ち、あなた

14) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XVII, O. C. II, pp. 521-522.

は情念を持つのです。私がどんなに熱狂したところで、あなたの甘美な悩ましさにはかなわないのであって、あなたのお心の糧となっている感情だけが、唯一の至上の幸福なのです。そのように純粋な快楽 « *cette volupté si pure* » を味わったのは、やっと昨日からなのです¹⁵⁾。

確かに表面的事実としては、サン＝ブルーはジュリの部屋で「快楽の一夜」を明かす。とはいえ、そこで彼が「至上の幸福」を味わうのは、肉体的欲望を満たすことが出来たからではない。引用文のなかでも、ことに「私は肉体的快楽を享受したいと思い、あなたは愛したいと思った « *je veux jouir et tu veux aimer* »」という表現や、「純粋な(肉体的)快楽 « *cette volupté si pure* »」という撞着語法とも呼ぶべき奇妙な表現に注目したい。これらの表現からは以下のことが確認されるであろう。サン＝ブルーはジュリの部屋で一夜を過ごすことにより、精神的な結びつきとしての「愛」から得られる幸福は肉体的快楽に勝るものであると納得するのだ、と。したがってこの快楽の一夜は、シャレーでの逢い引きを延期され、満たされぬ思いで不服を述べるサン＝ブルーにたいし、ジュリが既に次のようなロゴス(言葉＝理性)を用いて説得していたことを、ようやく彼が感情レヴェルで納得する瞬間でもあるのだ。その意味で、ここにみられる説得と納得の図式は、エリゼの書簡に見られるロゴスによる説得、感情レヴェルでの納得と図式的に酷似している¹⁶⁾。

心は肉体的感覚に従うことなど全くなく、それを導くのです。(中略)

15) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre LV, O. C. II, pp. 149-150.

16) 『新エロイズ』における説得の手段については、以下の論考がある。Santo I. Arico, *Rousseau's Art of Persuasion in La Nouvelle Héloïse*, Lanham, University Press of America, 1994. しかし、この論考においてはロゴスによる説得が中心に論じられており、論者がここで明らかにしようと試みているようなジュリのロゴスによる説得とサン＝ブルーの感情レヴェルでの納得という図式は示されていない。

真の愛はいつも控えめで、愛のしるし（＝愛情行為）を凶々しく奪い取ったりなどしません。真の愛はおずおずとかすめ取るのです。秘密と、沈黙と、臆病な羞恥が愛の甘美な熱狂を鋭くし、かつ隠すのです。愛の炎はあらゆる愛撫を尊くし、清らかにし、貞淑さが官能の歓楽の中でも愛に伴い、ただ愛のみが欲望に全てを許し与えても少しも羞恥心を失わずにいるのです¹⁷⁾。

引用文冒頭の一文からも明らかになる通り、ここでは精神と肉体との明確な二項対立をもとに議論が展開される。そして、肉体的欲望の高まりに身を任せることによって得られる快樂にたいして、羞恥心を備える女性の愛によってもたらされる充足感が絶対的に優位に立つことが強調される。ルソーがジュリの筆を借りながらここで提示する精神主義的な愛についての一節は、第一部書簡46に展開される女性の羞恥心にかんする議論の延長線上にあることは明らかだ。すなわち、男性と女性とは精神的＝道徳的次元において異なる存在であり、羞恥心とは自然の秩序における女性の位置を守ることから生まれるという主張である¹⁸⁾。羞恥心に対するこのようなルソーの概念が、『ダランベールへの手紙』執筆期以降、ディドロの唯物論的人間論に抗して形成されたものだという事は周知の事実である¹⁹⁾。しかしここで興味深いのは、羞恥心を失うことのない女性の「愛」に関するジュリの書簡（書簡46、50）と、「快樂の一夜」についてのサン＝プルーの書簡（書簡55）とをつき合わせた時、以下のことが明らかになることだ。すなわち、ジュリと一夜をとともにするという至福の喜びは、サン＝プルーの内面で「野蛮な（肉体的）欲望« volupté barbare »」²⁰⁾が高まりゆくのを、彼自身が内発的に「自然の秩序」に合わせて抑圧する過程で、大きな役割を果たしてい

17) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre L, O. C. II, p. 138.

18) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre XLVI, O. C. II, pp. 127-129.

19) 前掲の拙論でもこの点について触れている。井上櫻子、前掲論文、p. 12。

20) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre L, O. C. II, p. 139.

るということである。しかも、書簡 55 に確認されるサン＝プルーのこのように急激な内的変貌、そしてそれに伴う充足感は、それに先立つ書簡 54 において、ジュリの部屋に足を踏み入れたばかりの彼がそこにむしろ「(肉体的) 欲望の光景 « spectacle de volupté »」²¹⁾を見たと言われているだけに一層際立つのである。

そうです、そこ [=ジュリの部屋] では私のあらゆる感覚がいちどきに陶然とするのです。何か分かりませんが、感じとれるかとれないかくらい、バラよりも甘く、アイリスよりもあわい香りがここでは部屋中に立ち込めています。そこでは、心地よいあなたの声が聞こえる気がします。あちらこちらに散らばったあなたのお着物すべてが、それらが隠しているあなた自身のお身体のある部分を私の熱情に駆られた想像力に描き出してみせるのです²²⁾。

サン＝プルーの心の高揚にかんするこのような叙述は、シャレーでの逢引きを夢見るときのサン＝プルーの欲望の高まりを示すタブローと類似している。はじめてジュリによって「シャレー」での逢引きを提案された(第一部書簡 36) サン＝プルーは、その返信(書簡 38)において、「ありのままの自然」の残された秘密の隠れ家に思いを馳せ、その魅惑的空間がいかに五感に心地よい印象を与えるかということ、ことに視覚(木々の緑と蒼い空)、聴覚(鳥の鳴き声と小川のせせらぎ)、嗅覚(ブドウの花の香り)に与える心地よい感覚を描写しながら示していた²³⁾。引用文からも明らかになるとおり、ジュリの部屋という「秘密の場所」の奥深くへと侵入する際にも、やはり彼は嗅覚(あわく、甘い花のような香り)、聴覚(ジュリの声)、視

21) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre LIV, O. C. II, p. 147.

22) *Ibid.*, O. C. II, pp. 146-147.

23) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre XXXVIII, O. C. II, p. 116. この点については、前掲の拙論を参照のこと。井上櫻子、前掲論文、pp. 8-9。

覚（ジュリの衣服）を刺激するさまざまなイメージを列挙しながら、高まりゆく興奮を示そうとする²⁴⁾。二つの書簡に見られるこのような描写の類似性からは、「ありのままの自然」のイメージはサン＝ブルーの想像力をかき立て、自由な欲望の発露を許すものとして機能していることが再確認出来るだろう。ところで、「シャレー」での逢い引きを想像するサン＝ブルーの書簡（書簡 38）では、視覚、聴覚、嗅覚の順に外界から受ける心地よい印象が書き綴られており、彼の心が「ありのままの自然」へと開かれてゆく様子が確認された。これにたいし、ジュリの部屋へ侵入する場面を描いた書簡 54 では、まず直截的に外界からの刺激を受ける嗅覚的イメージを出発点として描写が開始される。しかし、聴覚的イメージが「鳥の声」から「ジュリの声」に置き換えられることを転換点として、もっぱらジュリの身体を喚起することを目指した視覚的イメージが連ねられる。まずは金髪（かみかざり）、次に首や胸元（肩掛け）、足（部屋履き）、そして最後にトルソ（コルセット）へと²⁵⁾。ここから、サン＝ブルーの精神は欲望する対象へと収斂してゆくさまがうかがえる。

逢い引きの計画がさまざまな障害によって延期されただけにいっそう、サン＝ブルーはジュリ（の部屋）の内奥へと歩みを進めるにつれ、限りなく欲望を募らせてゆく。ジュリとともに一夜を過ごすことは、思うがままに欲望を満たそうとするサン＝ブルー——（ジュリの書簡にある言葉を用いれば）

24) J. スタロバンスキーは、サン＝ブルーをルソーの分身とみなし、「快樂の一夜」にみられるサン＝ブルー＝ルソーのフェティシズム的傾向を、「欲望」と「距離」との関連という視点から論じている（Jean Starobinski, *L'Œil vivant*, Paris, Gallimard, 1961, pp. 113-118）。また、C. ラブローズは、ジュリの「肖像」を描き出そうと模索するサン＝ブルーのエクリチュールこそ『新エロイズ』という作品を成り立たせるものであると主張し、「快樂の一夜」のエピソードにみられるジュリの衣服の描写もそのようなサン＝ブルーのあくなき探求の一環ととらえている（Claude Labrosse, « La figure de Julie dans *La Nouvelle Héloïse* » dans *Le Portrait littéraire*, édité par K. Kupisz, G. -A. Pérouse et J. -Y. Debreuille, Presses universitaires de Lyon, 1988, pp. 153-158. とくにジュリの部屋での快樂の一夜については p. 154 参照のこと）。

25) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre LIV, O. C. II, p. 147.

「野蛮な欲望 « volupté barbare »」——に対し、羞恥心を失わない女性に対する精神主義的な愛——「純粋な欲望 « volupté pure »」——から得られる恒常的充足感をもって、「自然の秩序」に合わせて内面を律することの意義を納得させる契機となっている。サン＝ブルーは羞恥心という美德に目覚める。それは、S. コフマンが指摘する通り、男女の本質的な差異を受け入れること、すなわち、「自然の秩序」の中に我が身を位置づけて、物理的には恋人の傍らにいながらも精神的次元において男女の間に生起する距離を尊重することである²⁶⁾。かくして、サン＝ブルーが内的変貌を遂げることにより、父のまなざしのもとで「善良な娘」としてのジュリの体面、「尊敬される権利」が守られることとなる²⁷⁾。ジュリの部屋でのサン＝ブルーのこの急激な内的変貌は、のちにエリゼの庭において経験する彼の変貌の過程と酷似している。そのように考えると、サン＝ブルーの去勢の主題、すなわち、アベラールの主題はすでに小説の第一部、エタンジュ家での家庭教師としての生活において現れていると言えるだろう。

III. 『新エロイズ』における欲望と規律の相克と「自然」の両義性

しかしまた、このようにサン＝ブルーの欲望の抑圧の作業が繰り返し行われるのは、ひとつには、そのような抑圧、去勢の作業の直後に欲望の発露を促すような出来事が配置されているからに他ならない。たとえば、ジュリの部屋での快樂の一夜の直後には、サン＝ブルーとエドワード卿との決闘にまつわるエピソードが配置されているが²⁸⁾、この事件はまず、サン＝ブルー

26) Sarah Kofman, *Le Respect des femmes*, Paris, Galilée, 1982.

このような議論は小説の第四部以降においても再び見出されることになる。たとえば、ヴォルマルが留守の間、サン＝ブルーと差し向かいになることを恐れるジュリに対し、クレールは、結婚後のジュリがその内面において、「自然の秩序」を模する「共同体の秩序」における彼女の位置を守っていることが、彼女を「転落」から救うものだ、と主張している。*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XIII, pp. 500-501.

27) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre L, O. C. II, p. 139.

28) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre LVII-lettre LXI, O. C.

の内奥にジュリを所有したいという思いを再燃させることとなる。また彼とエドワード卿との和解の過程は、エドワードの人物像をサン＝ブルーとジュリとの関係を、まさに「自然に由来する結びつき」として擁護する者として決定づける。さらには、父権を源とする規律とサン＝ブルーの欲望の相克、あるいは父のまなざしのもとで善良であろうとするジュリの意志とサン＝ブルーの欲望との新たな相克の主題を導きだすこととなる。そしてそのようなエドワード卿が恋人達に供するのは、やはり「人里離れた田園」ではなかったか。最終的に彼の申し出は、父親の教えを守り、「良心」に従って——すなわち「自然の秩序」に従って情念を律しながら——生きようとするジュリによって断られるのではあるか²⁹⁾。

城館は古いけれども立派で住み心地がよく、付近は人気がありませんが、心地よく変化に富んでいます。庭園の果てを流れるウーズ川は目には魅惑的な光景を繰り広げるだけでなく、この川のおかげで食べものは容易に手に入れることが出来るのです。その土地からの産物は、節度を持って暮らす主人には十分なのであり、主人の管理によっては倍にすることもできます。いまわしい偏見はこのように幸せな土地にはまったく入り込む余地がないのです³⁰⁾。

さらに、第四部以降においてもエドワード卿の声は、サン＝ブルーの「治療」の直後に情念を再燃させかねないような形で介在してくる。クララン共同体の家政や日常についての書簡はそのほとんどがエドワード卿を名宛人とし、サン＝ブルーによって一貫してこの共同体のシステムを称賛することを目的として書き綴られている。それはエドワード卿がジュリとサン＝ブルーの恋の庇護者として現れるからであり、彼をクラランの領地へ招き入れな

II, pp. 152-167.

29) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Seconde Partie, lettre VI, O. C. II, pp. 207-210.

30) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Seconde Partie, lettre III, O. C. II, p. 199.

れば、サン＝ブルーの心から過去の恋の記憶を消し去る「ヴォルマルの方法」³¹⁾は完成しないからである。しかしながら、エドワード卿はクラランに身を落ち着けるどころか、自身の色恋沙汰のためにサン＝ブルーを共同体の外へと呼び寄せることとなる。そして、そのようなエドワード卿の恋とサン＝ブルーのイタリアへの旅の主題は、既にメーユリ巡礼の直後の書簡（第五部書簡1）において示唆されているのである³²⁾。

エドワードに誘われ、サン＝ブルーがクラランの領地、すなわち共同体の秩序における彼の「位置」から離れるやいなや、早くも彼の欲望の露呈の危険性が示唆される（第五部書簡9）。この書簡はサン＝ブルーがジュリの死の予知夢を見るというエピソードを通して、物語の結末がほのめかされているため、『新エロイーズ』の中で名高いもののひとつである³³⁾。ここで語られるジュリの喪失に対する意識は、ジュリを所有したい（あるいは所有したかった）という欲望をサン＝ブルーのうちに再燃させるものと言える。やはり、彼の欲望をかき立てるのはメーユリの隠れ家という「ありのままの自然」のイメージだ。そして彼の情念を律するのが他ならぬエリゼの庭という「秩序立てられた自然」であることは注目に値する。

ああ！　メーユリの岩の上、真冬、氷のさなかで、ぞっとするような深淵を目の前にしながらも、私の境遇に匹敵するような運命を享受する者が他にこの世にいるでしょうか。……私は泣いていたのです！　そして

31) 「ヴォルマルの方法」とは、É. ジルソンの論文のタイトルからとったものである。Étienne Gilson, « La méthode de M. de Wolmar », dans *Les Idées et les lettres*, 2e éd., Paris, J. Vrin, 1955, pp. 275-298.

32) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre I, O. C. II, pp. 525-526.

33) たとえば、次のような論考を参考のこと。Annie Becq, « Retours : une lecture de la Lettre IX de la cinquième partie de *La Nouvelle Héloïse* », *Amicitia Scriptor. Littérature, Histoire des idées, Philosophie. Mélanges offerts à Robert Mauzi*, textes réunis par Annie Becq, Charles Porset, Alain Mothu, Paris, Champions, 1998, pp. 145-152.

私は自分を哀れに思っていたのです！ そのために悲哀が私に近寄ったのです！……それでは、すべてを手に入れ、すべてを失ってしまった今、私はどうなるというのでしょうか³⁴⁾。

ゆっくりとではありますが、そのまま進んでゆき、既に中庭近くまで来たとき、エリゼの扉が開いて閉まる音を聞きました。そこから出てくる人が見えませんでしたので、外側をまわり、川岸を通過して、出来るだけ鳥のいるところに沿ってゆこうとしました。間もなく私は誰かがそちらの方へ近づいてゆくように思いました。そこで聞き耳を立てますと、あなた方お二人がお話しする声が聞こえました³⁵⁾。

小説の第一部における「快樂の一夜」、第四部における「エリゼの散歩」におけると同様、ここでも、サン＝プルーの欲望はメーユリの岩陰に残る「ありのままの自然」というイメージによって隠喩的に示されている。そして、その欲望は、エリゼの庭、すなわち情念を律する規範としての「自然の秩序」のイメージによって抑圧されたかに見える。エリゼの扉の音、そしてジュリとクレールの話し声という聴覚的刺激により、自然の秩序を模するクララン、とりわけエリゼのイメージを想起した時の急激な内的変化をサン＝プルーは次のようにクレールに語る。「即座に私はすっかり変わってしまったと感じました」³⁶⁾……この言葉は、エリゼの庭での「孤独な散歩」において経験した内的変貌を、かつてエドワードに語ったときの言葉といかに似通っていることか。「このたった一言 [=ヴォルマールの諫めの言葉] の記憶が甦ったために、私の心の状態は突然すっかり変わってしまいました」³⁷⁾

かくして表面的にはクラランの平和な日常は乱されることなく、ひとまず穏やかに手紙が結ばれる。しかし、この書簡に展開される自然描写のより細かい部分に注目すると、そこに欲望の露呈という悲劇的結末が暗示されてい

34) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre IX, O. C. II, p. 615.

35) *Ibid.*, p. 618.

36) *Ibid.*

37) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, O. C. II, p. 486.

るのが明らかになるだろう。しかも、それはもはやサン＝プルーの欲望ではなく、むしろ「徳高き」妻であり、母であるはずのジュリの欲望なのである。たとえば、クラランから出立しながらも、ジュリの安否をなんとしても確かめたくなり、再び共同体へと立ち戻ってゆくサン＝プルーの様子をたえず眺めている「自然」の事物は、他ならぬ湖——すなわちジュリの欲望のメタファー——なのだ。「私の頭は、不吉な夢でいっぱいだったので、何も耳に入らず、また何も目に入りませんでした。昨日私の左手にあった湖が、今や右手にあることにさえ気づきませんでした。」³⁸⁾

作品の第一部から第五部半ばにいたるまで、欲望に身を委ねようとするサン＝プルーにたいして、ジュリは一貫して教え諭す立場にある。しかも「貞淑な女性」として彼女が展開する議論には、ルソーが百科全書派の思想家たちとの論争を通して築き上げた独自の人間論と重なり合う部分が少なからずある。しかし、とりわけ第五部後半以降の書簡を注意深く読み進めてゆくと、むしろ「貞淑な妻」とされているジュリ自身がその心の奥底から過去の恋愛の記憶を消しえているのかという疑問を抱かせる記述が散見されるようになる。

先の引用文においてほのめかされている従姉妹たちのエリゼでの語らいは、クレールがサン＝プルーに恋心を抱いているのを察する契機となっている³⁹⁾。クレールの恋煩いに対処すべくジュリが企てるのは、サン＝プルーとクレールをクラランの領地へと呼び寄せて結婚させることである。彼女がサン＝プルーをいこと結婚させることによって目指しているのは、結婚という神を源とする不可侵の契約により、彼女とかつての恋人との間に乗り越えることのできぬ距離を介在させることだ。そしてそのような「距離」の生起は、自然の秩序を模したクララン共同体にサン＝プルーとクレールを招き入れ、二人に共同体の秩序における位置を守らせることによって可能となる。かくしてサン＝プルーの欲望を完全に抑圧し、純粋な友愛の念へと転化させようとするのだ。『新エロイーズ』第四部以降では、サン＝プルーの過去の

38) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre IX, O. C. II, p. 617.

39) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre XIII, O. C. II, p. 631.

恋愛の記憶を消し去ることがいかにして可能か、という重要な主題となっている。そのため、このような表面的な物語の展開に注目するならば、サン＝プルーに結婚を提案するジュリの書簡は、キリスト教徒としての慎み深い徳を持つようにと教え諭すことを目的としたもののように映る。すなわち、自身の徳によりメーユリでの危機を回避しえた以上、もはや再び過ちを犯すことはないと自負するサン＝プルーに、人間の精神力を過信するストア的な徳を持つのではなく、神を源とする自然の秩序を守ることによってこそ、心の平静は得られるのだと説得している、と。

しかし、サン＝プルーの欲望の露呈の懸念を書き綴ったこのジュリの手紙にはジュリ自身の欲望が投影されているのではあるまいか。純粋な友愛の念によって貫かれたアポロンの間での集いのイメージを、ジュリはサン＝プルーに宛てた最後の書簡において提示している。

私は神様がこの世で私に至福をお与えくださったことに思いを馳せながら、ファンションを別にしても、父上、夫、子供たち、従姉妹、エドワード卿、あなたが私の回りを取り巻いているのを見ました。ファンションも少しもこの光景を損ないはしませんでした。みな幸福なジュリのために集まってくれているのです⁴⁰⁾。

ジュリにとって、共同体の成員にその秩序の中での位置を守らせることは、また同時に彼女自身をそのような規律から逸脱する危険から身を守ることにほかならない。しかし、このように友愛によって結ばれた人々へののみ出入りが許される「アポロンの間」のクラランの領地における地理的位置づけからは、ジュリの心の中におけるこの食堂の位置づけが、実はきわめて両義的であることが明らかになるだろう。

この特別な部屋は家の角にあって、両側に窓があり、光がさしています。

40) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Sixième Partie, lettre VIII, O. C. II, pp. 688-689.

一方は、庭の方に向いていて、木々の向こうに湖が見えています。他方にはブドウの木の植わった広々とした丘があり、既に実がなりはじめていて、二ヶ月後には収穫が行なわれることになるでしょう⁴¹⁾。

よそ者は決して足を踏み入れることが許されず、したがってそこに集う人々同士の友愛の念と心の透明性が約束されるはずの「アポロンの間」は、クラランの秩序と平和を象徴的に表す「ブドウ畑」と、ジュリの欲望を表す「湖」との間という微妙な位置におかれている。さらに、このような特別な食堂の描写に先立ち、ジュリが食道楽であり、いかに豊かな食卓を準備するために細心の注意を払っているかということが述べられている⁴²⁾。食欲は性的欲望のメタファーであることは改めて詳述する必要もないだろう。このようなアポロンの間の描写が、「徳高き」ジュリの感化力を讃える書簡のほぼ中心に据えられているのは示唆的である。

*

物語を展開させてゆく原動力である欲望と規律との相克はこのように「ありのままの自然」と「自然の秩序」のイメージにおいて隠喩的に示されている。友愛のイメージを提示しつつ、サン＝ブルーをクレールと結婚させ、共同体の秩序の中に位置づけようとするジュリの言葉による説得に、サン＝ブルーは独身を通し、彼女を精神主義的に愛することを決意しているため、かたくなに耳を傾けようとはしない。そして、ついに不安を抱きながらもジュリは家族とともに遠足に出かける。彼女を転落から守り、徳高き母として妻として生きることを可能にしてくれていた⁴³⁾ 共同体の秩序から外へと踏み出したとき、長く秘められた彼女の欲望は露呈することとなるのだ。

このように見てみると、この作品の標題が示すとおり、ジュリとサン＝ブルーの悲恋は、教え子と恋に落ちるという過ちを犯したがために極刑に処せ

41) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre II, O. C. II, p. 543.

42) *Ibid.*, pp. 542-543.

43) *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre I, O. C. II, p. 401.

され、神への愛と往時の恋人への精神主義的愛に生きようと決意するアベラールと、かつての情熱を忘れることなく、時に奔放なほどに愛を歌い上げるエロイズの恋物語を下敷きとして創り上げられたことが明らかになる。したがって、G. ベンレカッサも示唆する通り⁴⁴⁾、18世紀にもてはやされたいわゆる「愛の書簡」——アベラールとエロイズの書簡集のうちの前半部分——のポーブによる英訳、そしてコラルドーによる仏訳との間テキスト性に注目しながら『新エロイズ』を再読するとき、この作品に秘められたより多くのメッセージをすくいとることが可能になるだろう。サン＝ブルーの去勢というアベラールの主題は、既に作品の第一部から現れているし、また逆に、表面的にはジュリの豊かな感受性と徳高き生き方にまわりの人間が感化されてゆくさまを描いている第四部以降にも、欲望の露呈の危機は随所において確認される。サン＝ブルーの「去勢」、あるいは欲望の抑圧の主題に注目すると、『ジュリ』はアベラールとエロイズの物語を人間主義的文脈におき直して変奏したものであることが明確になる。というのも、「ありのままの自然」のイメージによってかき立てられる奔放な欲望にたいする「治療薬」を、中世の恋人たちの書簡に示されるように敬虔な信仰心に求めるのではなく、情念を律する規範としての「自然の秩序」に従おうとする個人の内面の力に見出そうとしているからである。

しかしまた、『ジュリ』において欲望の発露とその抑圧の主題が繰り返し現れるのは、ルソーが「病」とその「治療薬」とを、ひとつには、自身が完全に整理しきれぬままに保持する「自然」という極めて両義的な概念のうちに見出しているからに他ならない⁴⁵⁾。さらに、ジュリの欲望の露呈によって、一見何の破綻もないように映る立法者ヴォルマールのシステムが崩壊するのは、おそらく、心の内奥にかかわらず欲望を秘め続けたジュリ／エロイズに、サン＝ブルーを教導するというアベラールの役割をも演じさせたか

44) Georges Benrekassa, « Le désir d'Héloïse », dans *Éclectisme et Cohérences des Lumières*, Paris, Nizet, 1992, pp. 55-67.

45) Jean Starobinski, *Le Remède dans le mal. Critique et légitimation de l'artifice à l'âge des Lumières*, Paris, Gallimard, 1989.

らに他ならないと思われる。かくしてサン＝ブルーの欲望とその抑圧の問題に注目しながら考察を進めるうちに、次第にジュリの欲望、あるいは彼女の「回心」の問題が浮上してきたわけであるが、この問題については機会を改めて論じることにしたい。

付記：本研究は平成 20 年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究（B）（課題番号 20720091）の助成を受けたものである。

